

〔兼葭堂雜錄三〕安永三年、東武より曲屁福平といへる者浪花に上り、道頓堀において、屁きてひりの曲撒まを興行し、古今無雙の大當なりし、尤屁の曲といへるは、昔より言傳へし階子屁、長刀屁などいへるものは更なり、三絃、小唄、淨瑠璃にあはせ、面白く屁を放わけたり、實に前代未聞の奇觀なり、委くは風來山人の放屁論に見へたり、是を以て證とすべし、放屁論云、先頃より兩國橋の邊に、放屁男出たりとて、評議とりく、町々の風説なり、夫熟惟ば人は小さき天地なれば、天地に雷あり、人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撒るこそ持まへなれば、いかなれば、彼男むかし言傳へし階子屁、數珠屁は言も更なり、礎すがき、三番叟、三ッ地、七草、祇園囃、犬の吠聲、鶏屁、火花の音は、兩國を欺き、水車の音は、淀川に擬す、道成寺、菊兒童、端歌めりやす、伊勢音頭、一中、半中、豊後節、土佐、文彌、半太夫、外記、河東、大薩摩、義太夫節の長き事でも、忠臣藏、矢口の渡、のぞみ、次第一、段づつ、三絃、淨瑠璃に合せ、比類なき名人出たりと聞よりも、見ぬことは咄しにならずと、いざ行て見ばやとて、二三輩打つれて、横山町より兩國橋の廣小路に渡らずして、右へ行ば、昔語花咲男とことごとしく、幟を立て、僧俗男女押あひへし合ふ中より、先看板を見れば、怪しの男、尻をもつ立たる後に、薄墨に隈どりし彼道成寺三番叟など、數多の品を一所によせて、畫きたるさま、夢を畫く筆意に似たれば、此沙汰まらぬ田舎者の、もし來かゝりて見ならば、尻から夢を見とや、疑はんとつぶやき乍ら、木戸をはいれば、上に紅白の水引ひきわたし、彼放屁男は、囃方と共に小高き處に座す、其爲人中肉にして色白、三日月形の撥鬢、奴縹の單に、緋縮緬の繻伴、口上さはやかにして、憎氣なく、囃に合せ、先最初が目出度三番叟屁トツハイヒヨロ、セツ、と拍子よく、次が鶏、東天紅をブウブツと撒わけ、其あとが水車ブウ、と放ながら、己が身を車がへり、さながら車の水勢に迫り、汲ては移す風情あり、サア入替り、と打出しの太鼓と、共に立出云々、是は浪華へ上る以前、江戸兩國橋の邊にて興行せし評判なり、右にて其藝品の大概を推て